

按ずるに、元祖因幡易英は、城内新丸に居邸ありて居住したるよし、慶長の古圖に載せたり。城郭内の諸土城外へ出されし時、此の地に邸地を賜はりたるものなるべし。扱夫れより世々居住せしかど、明治廢藩置縣の際邸地を賣却して退去す。

○奥村因幡易英傳

易英は、伊豫守永福の次子にて、幼名を又十郎と稱す。野田山墓碑記に、初諱榮卿、後改易英。號因幡。元龜二年歲次辛未某月某日、産於尾州愛智郡荒子邑。とあり。家譜及び家記等を按ずるに、天正十一年五月父兄に従うて能登の末森に入城す。翌十二年佐々成政末森城を襲ひける時、十四歳にて初めて武功を顯す。利家卿之を賞して召仕はれ、此の時より奉仕す。同十七年より世子利長卿へ屬せられ、家祿千石を賜はりけり。翌十八年關東松枝八王寺の城責及び慶長五年加州大聖寺の城攻に武功を顯し、同十九年大坂陣に眞田丸に於て鐵炮疵を被る。家祿屢加恩ありて、一萬千五百石を賜はる。寛永元年に父永福卒す。永福の隱居料三千三百石を易英に加恩ありて、都合一萬四千四百五

十石を領し、執政の一人と成り、金澤城の留守居たる事凡そ三十年。寛永二十年十二月廿一日歿す。享年七十三。墳墓を野田山に築きたり。易英の父永福末森籠城の功に依り、利家卿賜はる處の着料の甲冑をば易英に傳與し、易英其の孫庸禮へ傳へけるを、庸禮其の由を利常卿へ申告して、寛文元年綱紀卿入封の時之を獻す。公今枝近義に命じて甲冑記を作らしめ、其の權に記載せしむ。又鳩巢文集に、奥村家鑑銘并序を載せたり。序中に云ふ。奥村君伯亮有古鏡甚偉。君嘗告余曰。此我祖因州君遺物也。子盍爲我銘之。余曰。爲人子孫者、在祖考之器。雖骨角羽毛之微。猶將存而傳焉。況於鏡乎哉。銘而藏之宜矣云々と。是もまた由縁ある古鏡ならんか。

○奥村壹岐庸禮傳

庸禮は、因幡易英の男主殿和忠の子なり。和忠父に先だちて歿す。故に承祖たり。野田山墓碑記に云ふ。庸禮一諱和豐、字師儉、小字多宮、既長稱因幡、後稱壹岐、別號顯思。父主殿、母成瀬氏、寛永四年歲次丁卯十有一月七日生。于金澤私館。寛永二十年會祖考致仕、以祖考早世、先考爲嗣、食

祿一萬石餘、承應元年擢爲執政。萬治三年選爲鋒將。寛文九年增加食祿二千石。辭避不許。貞享三年十月十九日病俄危。羽林公使執政及近侍士數問安否。既而羽林公親臨視。恩眷鄭重。時又賜頭巾・屏風・道服・綿襖及美果珍味。務加調護。而沈痾綿延。肢體羸瘦。至明年丁卯六月八日申時終于正寢云々。歷仕微妙公・陽廣公及今羽林公。忠丹奉上。不有其身。羽林公寵任特甚云々。少好禪學。既覺其非。深信儒教。一時老儒先生樞侍承教。名齋曰敬齋。堂曰德始。莊曰耕心。造次必於學。而以其職在于城。講學之暇。輪日寅習武藝。未嘗一日玩幅空過矣。晚歲工夫有得。始病發也。不敢以死生繫于心。其言漂々一出。忠誠。聽者竦動。豫記後事。葬祭專用儒法云々。右は貞享五年嗣子庶輝の記載する處なり。富田景周の燕臺風雅に云ふ。庸禮崇敬吾文宣。枕藉吾墳典。師明儒舜水朱先生有年矣。崇其師之禮非宅人所及。從國公述職而在江都。則調先生親受教云々。天和壬戌年著讀書拔尤錄二卷。上木、景周皆讀之再三復、一篇要領在誠敬底。而勵人之志深切。林直夫・木下順庵各序其卷端賞之云々。平次按ずるに、右庸禮が著せる讀書拔尤錄

は、薛文清公の讀書錄の要文を撮り、其の尤なる要語を簡拔せしもの也。自序に、余自登歲至于而立。頗好禪學。參臨濟曹洞之密旨。窺圓覺華嚴之教法云々。自此以往幡然改之。崇敬聖賢。尊信六經及宋儒正學之書。嗚呼幸哉。斯生之免乎陷溺矣。於是乎、與順庵木先生講論文席。切磨有年。既而浴朱舜水先生之儒流。立弘文學士院之門雪。執師資之義。探道學之奧云々。とあり。右自序にて、學力の程知られけり。さて庸禮が學才博識なる事實及び執政中の才力披群なりし事共、種々其の時世の記録に記載あれど今爰に略す。庸禮の嗣子壹岐庶輝も、父在世以來綱紀卿に奉仕し、采地屢加恩ありて五千石を賜はりけり。延寶・貞享の頃若年寄家老役を勤め、父庸禮歿後遺知共一萬七千四百五十石を領し、寶永元年十二月從五位下丹波守を拜任す。是當家叙爵の初めなり。是より後子孫世々執政の家柄と成り、家祿一萬石を世々所領して執政八家の一人たり。

○月の輪

明治廢藩以前は、新堂形米倉の前多賀氏の邸宅門前は、新堂形前とも稱し、廣見の空地にて、草原中に往來脚手に付